

記録
35ミリ
白黒／21分

- 企画
全国地域婦人団体連絡協議会
- 協賛
中外製薬株式会社
- 撮影協力
東京都瑞穂町

スタッフ

- 製作
山高しげり
村山英治
- 脚本
鮎沢美子
- 演出
青山通春
- 撮影
佐藤 正
- 音楽
渋谷 修
- 解説
加藤玉枝

さようなら蚊とはえさん

文部省選定 厚生省推薦

桜映画社の記念すべき第1作は、当時環境衛生の大きな問題であった蚊とはえの駆除をテーマとしたもので、農村編『さようなら蚊とはえさん』と、都市編『百人の陽気な女房たち』を相次いで製作した。まず農村編だが、当時作られた作品のリーフレットが、その頃の雰囲気をよく伝えている。



暖くなると、きまって出てくるのが蚊とはえです。いくら追っても殺しても祖先伝来の蚊とはえは、絶えません。鶏は蚊に攻められてトサカから血を流したり、暑い間は卵もろくに産みません。牛の乳の出も悪く、馬だって豚だって、サシバエや蚊に攻められてみんな神経衰弱なのです。お隣の中国の、はえも蚊もいなくなった町の土産話は有名ですが、日本にも蚊もはえもない村や町がふえてきました。

私たちの町の婦人会では、そのような村を見学しましたが、あんなことなら私たちにもできると、保健所の人にくitemらって、蚊やはえの発生について勉強しました。蚊やはえをなくすには、私たちの周囲の蚊やはえの製造工場（発生源）をなくしてしまわなければなりません。

しかし、いざ蚊とはえの撲滅に乗り出してみると、厄介なのは蚊もはえも平気な人たちです。頭の古い人は、はえがたからないようじゃごちそうじゃない、といばっています。漁村にも、はえが多いと景気がいいと喜ぶ気分があるそうです。次に問題になるのは発生源に薬をまく費用で、家畜や堆肥や肥溜めの多い農村から蚊やはえをなくそうなんて莫大な金がかかって、それこそお金を捨てるようなものだというのです。